島根教神協会報

発行日/令和5年11月10日
発行者/島根県教育関係神職協議会

第42号

神社と数学

副会長　山崎　寧子

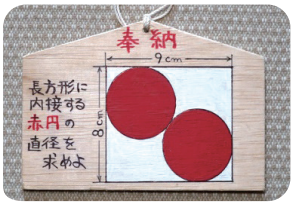
教神協は国語、社会の先生が多く、また神社では言霊を大事にするなど、神道界はほぼ文系の世界である。

しかし、ご存知のように、江戸時代から明治にかけて算額が神社仏閣に奉納されている。和算において問題が解けたことを感謝し、ますます勉学に励むことを祈念しての奉納である。次第に問題の発表の場となり、問題だけを奉納したり、それを解いて奉納したりするようになった。算額が一番多いのは福島県、ついで岩手県、埼玉県となっている。これは日本独自の文化であり、世界中で類例はないらしい。図で描かれている問題が多いが、挑戦してみると、三平方とか中点連結とか西洋数学が入って来る前に独自の方法で解いている。レベルは極めて高く、世界の最高水準にあった。

日本に和算という独自の数学があったおかげで、西洋数学をすんなり受け入れる事が出来た。また、数学のノーベル賞とも言われる四年に一度のフィールズ賞を日本人では三人が受賞している。これも西洋数学で初めて四則演算以外にふれたのではなく、根底に和算があり、数学の文化を育んで来た歴史の上になし遂げられた偉業であると思う。一見、神社とは無関係な学問も、神社を社交の場として発展して来ている。

今、初詣、節分などの年中行事。初宮参り、七五三などの人生儀礼でしか神社に参拝しない人達が増えている。

そういう人達にも、神社に集ってもらう方法を模索する上で算額はヒントになるのではないかと思う。異分野とのコラボが人々の出会いの場を作り、日本の文化を守り発展させていく事の一端を担う事ができるかも知れない。



和歌の奉納など行っている神社もあるが、文系以外の物理、化学、

あるいは芸術など神道とは無関係と思われる何かを神社を介して日本文化の一つとして育む事も可能だと和算は示してくれているのではないだろうか。

現職教員等研修会に参加して

松江支部　廣江　直澄

神社本庁にて、ZOOM参加も可能なハイブリッド形式で行われ四十一名の参加者があった。

主題は「平和教育について」であるが、学校教育での広島・長崎の原爆に関するものとは違った視点に立ったものだった。

まず講義Ⅰは元全教神協常任理事の上杉千文先生で「沖縄の遺骨収拾について」の講演だった。参加される経緯と活動の詳しい状況が報告されたが、上杉先生が「戦後処理というのは憚るが、遺骨収集は国をあげてするべきこと。いい加減にしている。民間に頼りすぎている」と発言されたのは印象的で、かつて硫黄島の自衛隊基地に視察に訪れた安倍元首相が、滑走路の下に眠る遺骨に想いを寄せてアスファルトに跪く姿が思い出された。

更に、沖縄戦というと日本軍による住民の集団自決が度々取り上げられるが、荒川通信士が打電した最後の電文の話があった。それは大田中将が海軍次官に宛てた電文で沖縄戦にて県民がどのような状況下で共に戦ったのか報告するもので「沖縄県民への後世特別の配慮を」と締め括られていた。研修が終わってから改めてその電文を読んでみた。平和教育とは先人の生き様を知り、光と影の両面から学ぶべきだと思った。

講義Ⅱは築島神社宮司で元海上自衛隊一等海佐の渡部年晴先生の「国の平和を守るため国防の最前線の部隊指揮官として～神職の子弟出身者として如何に任務を遂行したか～」で渡部先生が皇學館大学出身の自衛官として勤務されるまでの経緯と艦長としてのプレッシャーの話があった。異色とも言える経歴の艦長として「部下一人一人を全力で愛し守る。感謝の対象として接する姿を部下はきちんと見ている」という思いで、勤務方針は「明朗、誠実、精強、即応」と言われた。取り組まれた覚悟と心構えはどのような組織にも共通するものだと感じた。

その主なものを書き出すと「組織はトップで決まる」「あらゆる情勢を想定した対応」「イメージトレーニングの励行」「判断は柔軟な思考と優勢順位に基づく」「正しい状況判断は現場第一で」「統率法は愛情、思いやり、優しさ」「結果に対する正しい評価」などであった。自衛隊に関してはハラスメントや過酷さなどが強調される報道が目に付く昨今

だが、渡部先生のような取り組みをされた自衛官もいた事を認識しなくてはならないと思った。国防の要として命懸けで日々の勤務に就いておられる大多数の自衛官には、尊敬と感謝しかないのである。

全国大会に参加して（一日目）

出雲支部　**塩野　清明**

第六十二回全国教育関係神職協議会全国大会・中央研修会は七月二十八日、二十九日の両日、福島県郡山市「郡山ビューホテル・アネックス」を会場に開催された。開会式典では、神宮遙拝に続いて国歌斉唱、教育勅語奉読、敬神生活の綱領唱和と続いた。

次に主催者を代表して寶來扶佐子会長は、コロナ禍に教育現場で失われたことは大きい。今こそスローガン「神道精神に根ざした眞の日本人を育てるために」のもとに、神道人・教育者として手を取り合って取り組んでいきたいと述べられた。

続いて来賓の田中恆清神社本庁総長、丹治正博福島県神社庁長から祝辞を頂いた。田中総長は、激動の時代にあって正しい歴史認識をもたせ、日本人として誇りをもたせる教育の重要性を強調、全教神協の活動に敬意を表された。

○令和五年度総会

荒澤瑞男常任理事を議長に選出し、令和四年度の事業報告と決算報告、令和五年度の事業計画案と予算案がいずれも原案通り承認された。

○事業計画について

新型感染症の流行から三年以上が経過し、コロナ禍も収束した感があるが、育まれるべき人心の和や連帯を如何に取り戻してゆくか青少年に関わる「教育関係神職」の担うべきところが大きいことを確認した。

急激な少子高齢化や過疎化を踏まえ、教員と神職両面での実践例を持ち寄り、検討・波及させることは、当会が斯界において果たすべき役割である。青少年の健全育成に向けて、地に足の着いた全教神協活動の実践を示した。

具体的な事業計画

①神社本庁の施策に沿った事業の推進

②全教神協本部と協神協との連携の強化

③教育再生運動の推進

④「神道精神に根ざした眞の日本人を育てるために」の実践・具現化を掲げた。

次に、産経新聞客員論説委員の湯浅博先生による「米中覇権争いと日本の覚悟」と題した講演が行われた。まず、日本国外の状況として、中露、北朝鮮の核開発、インドをはじめとした「グローバル・サウス」の台頭を指摘。また、「蝕む内憂」として、憲法改正の停滞、香港・新疆ウイグル自治区への弾圧の無関心、中国による日本国内の土地購入、

中国軍関連、大学から大量の留学生受け入れ等を挙げた。

中国の一帯一路はパクス・シニカ（中国による世界の平和維持）を目指す構想であり、絶対に阻止せねばならないと解説された。

基調講演終了後には、「教育現場のために何ができるか」「神社（社頭）において何ができるか」「氏子・崇敬者のために何ができるか」を主題に分科会が行われ、実践報告や意見交換が熱心に行われた。まとめで、寶来会長から社頭を学びの場として、総代には子供や孫に正しい教育を期待すると語られた。

全国大会に参加して（二日目）

仁多支部　**植田　由紀**

昨日の懇親会の興奮冷めやらぬまま迎えた二日目、ホテルから徒歩五分弱に鎮座する「安積國造神社（あさかくにつこじんじゃ）」にて正式参拝。朝から三〇度を超える暑さであったが清々しい空気に触れる良い時間であった。

記念講演は赤坂憲雄先生による「異邦人が見た日本人の宗教」。イザベラ・バードという大英帝国の旅行家の紀行を基にお話くださった。なぜ日本は植民地にならなかったのか。キリスト教の普及を拒むものは何なのか。これには宗教的理由があるのではないか。「一神教（キリスト教）を信じる西洋人にとって、山川草木あらゆるものに神を感じる多神教的な日本人のこころは到底理解できないこと。教会も教義も無ければ伝導の仕組みもない」バードはこれは宗教ではないと・・・。「神道」とは太古より日本民族固有の信仰思想であり、日常生活に溶け込んでいる。一定の神聖な場所において可畏きものを畏敬の念からおまつりすること「まつり」を中心とする信仰。神道を外から見ることでその本質に気付かされた気がする。

全体会では昨日の分科会（A教育現場のために　B神社社頭において　C氏子・崇敬者のために何ができるか）の総まとめを代表者が発表。神社には歳時記があって、お祭りがあり、地域の文化・歴史の宝庫。

このことを学校のみならず地域一体となって伝えて行くことが使命である、というまとめになった。

レポート作成した後、閉会式典。開会式典の時の神宮遥拝ではバラバラであった二拍手が綺麗に（本当に！）揃った時のゾクゾク感は今でも忘れられない。僅か一日半の集まりではあるが皆の心が一つになったことを感じずにはいられなかった。蓬莱会長、宮本福島県神社庁副庁長からの挨拶では「日本の少子高齢化に伴い、様々な問題が浮かび上がっている。若者が未来に絶望しない世を造るため、教員であり神職という二重の聖職である私達が何をしなければならないか、考えて実践するとき」という言葉に感銘を受けた。

次に大会宣言。「人類は数多くの課題に直面している。このような時代を生きていく子供たちに対し、幼児・初等教育から一貫した取り組みが重要。会員の責務として

①子供たちの教育に積極的に働きかけていくこと

②教育勅語の内容に鑑み、日本人としての精神をしっかり持たせること

③国を愛する心を育成する教育の推進に努力すること

④会員相互の研鑽を一層積み重ね、愛国心と神道精神に基づく豊かな心を持った日本人を育成していくこと」

という大会宣言を満場一致で採択した。最後に聖寿万歳を行い閉会となった。

令和元年以来四年ぶりに参加した。一番強く思ったのは「人は集わなければならない」ということ。膝を突き合わせ、目を見て、手を携えて人間の温もりの中で初めて自分の身（実）になることを改めて感じた。コロナ禍で大変な思いをしたことは間違いないが、気付きはそれ以上にたくさんあったことを忘れずに粛々と日々の神明奉仕に勤めたい。

令和5年度島根教神協・中国ブロック研修会について

松江支部　**廣江　直澄**

この研修会の様子は、神社新報にも大きく取り上げて頂き多くの方々の目に触れる事となりました。研修会の様子が詳細で分かりやすい記事でしたので、担当県として企画、準備に係る視点を交えて報告できればと思います。

昨年の防府天満宮を主会場に行われた研修会を終えて、その帰路で参加した執行部で島根県が担当するブロック研修会をどのようにするか話し合いました。その後も協議を重ね形となっていきました。八月の酷暑対策を意識し参加した他県のブロック研修会を参考にしながら、当県らしいものはと何かを検討しました。

まず、会場選びは、交通の利便性と一箇所でコンパクトに研修会、懇親会、宿泊が完結されるようにと考え松江市の宍道湖畔に位置するホテル白鳥といたしました。二日目の正式参拝は比較的移動距離の少ない出雲国二ノ宮の佐太神社で行うことといたしまし

た。

五年に一度のブロック研修会の担当時は、県の総会研修会を兼ねる事となり総会を終えて、看板を付け替えて講演会用の懸垂幕も全員で協力して準備をしました。

今回は来賓として島根県神社庁長の角河様がご多様の中ご臨席の上、ご丁重なるご挨拶を頂きました。懇親会へのお誘いも致しましたが、他の行事が重なり叶わない事を残念がっておられました。

また、今回の研修会のコンセプトは「コロナ禍を乗り越え直会が普通に行われ、本来の祭りの姿に回帰されて来た事は同慶の至り」と考えました。そこで直会に欠かせないお神酒つまり日本酒にスポットを当てようと思いました。

情報誌などで利き酒師の石原美和氏の活動を知り、各地の酒蔵を訪ね、日本酒と神様、農家の米作りなどの縁を感じて利き酒師の資格を取られた事も講師選定理由となりました。

講師依頼をするにあたり神社庁主事和田様、万九千神社宮司錦田様には大変お世話になりました。

講演内容も好評でしたが、その後の懇親会でも各県から持ち寄った純米酒を使った利き酒会は盛り上がり、日本酒の解説をして頂き、俄かに品評会のようになりました。この盛り上がりは二次会会場まで継続され、ある参加者からは「やはり飲みニケーションは必要です」と感想が出る程でした。

二日目は、佐太神社の正式参拝の後「悪切り祈祷」を冷房の効いた舞殿で受ける事となりました。

出雲地方独特の諸悪厄災の祈祷を受けることができたのは、他県の方にとっても貴重な経験になった事と思いました。佐太神社宮司の朝山様に

は、正式参拝から講演までご無理を申し上げたにもかかわらず、ご高配をいただき感謝申し上げます。

今回のブロック研修会の開催にご尽力いただいた関係各位に心より感謝を申し上げますと共に来年の鳥取県米子市で開催されるブロック研修会で、各県の皆様と元気で再会できます事を楽しみにいたしたいと思います。

このQRコードからブロック研修会の画像を閲覧できます。尚、この画像の取り扱いにはご配慮をお願いいたします。

令和五年度 事業計画

- 六月十七日　現職教員研修会　神社本庁
- 七月十二日　役員会　ビッグハート出雲
- 七月二十八日、二十九日　全教神協研修・総会　福島県郡山市
- 八月十九日、二十日　島根県教神協総会・中国ブロック研修会　島根県松江市
- 十一月　会報第四十二号発行

令和六年度 事業計画

- 六月　現職教員研修会
- 七月　役員会　全教神協研修・総会　香川県
- 八月　島根県教神協総会
- 八月二十四日、二十五日　中国ブロック研修会　島根県教神協総会　鳥取県米子市
- 十月　会報第四十三号発行

会員寄稿

教職を退いて

出雲支部　花田　真宜

私事ではありますが、令和二年度末、令和三年三月三十一日をもって、三年早く教職を退きました。コロナ禍や人手不足の中で奮闘していらっしゃる先生方には申し訳ないのですが、教職と神職を両立させることに精一杯で、自分の健康も含めて考えると、早く辞めてよかったと思っています。（実際、辞めて二年目に病気が見つかりました。）

また、ちょうど辞令交付式の日に父が帰幽し、辞職した一年目は様々な手続きや相続のこと、何よりも権正階の取得と宮司の拝命、代表役員の

登記が最重要課題でした。

さて、学校での道徳教育や生徒指導等の教育活動を通して児童と関わらなくなった今、教神教の理念を推し進めるために自らどのように行動すればよいかということは、日々考えさせられる課題です。

やはり、「神道精神」や「日本の心」を分かりやすく伝えていくことが重要ではないかと考えます。感謝すること、敬うこと、相手を思い遣ること、分かち合うこと等です。そのことは、学校現場の現状や先生方の苦悩を考えると、保護者である若い世代の大人に対しても必要だと感じています。

ここ数年、総合的な学習の時間や生活科で神社を訪れた児童に話をすることが増えました。私の最終勤務校でもある地域の小学校が、総合的な学習の時間や生活科に力を入れているからです。神社の歴史や御祭神、お祭りについて聞かれることが多いのですが、今年、夏休みの宿題で調べているからと訪れた児童からは、「宮司さんの仕事は、何ですか？」と尋ねられました。皆さんなら、どう回答されますか？　私なりに考えていることを伝えましたが、「神職とは何か」ということも含めて、改めて考えさせられる機会になりました。子どもたちに教えられることも多々あります。

校外学習で神社を訪れた子どもたちが、新聞作りやワークショップでの発表で神社について発信し、それが保護者や地域の皆さんに伝わることを願っています。

全教神協ホームページ

本会のあゆみ・本会の取り組み広報誌などの情報を発信しています。是非、ご覧ください。

https://zksk.jp

編集後記

新型コロナ感染症は、五類感染症となり、メデイアでの露出は減りました。世の中が落ち着きを取り戻したように見えますが、島根県では相次ぐクラスターの発生、学年閉鎖、学年閉鎖と続きました。それでも、文化祭、体育祭、修学旅行と子ども達は日常を取り戻して来ています。

世界では、きな臭い事が起きていますが、子ども達の健やかな成長を願っています。

お忙しい中、玉稿をお寄せ下さった会員の先生方に深謝申し上げます。

（山崎　寧子）